世田谷村日記

石山修武

十二月一日

昨夜は宮城県本吉町、日門湾の海洋館でリアス会の総会出席。唐桑町長佐藤和則もわざわざ来てくれて話しができた。気仙沼市との合併問題が出ていて当面の難問らしい。唐桑、本吉町と気仙沼市が合併すれば国から二百五十億円金が出るとの事で、要するにその金を巡る動きだ。佐藤はクレバーだから、要するに五年後の唐桑をとるか、十年後の唐桑を待つかだと言っていた。十年先の事を考えれば唐桑自立の径が当然だし、短期で考えればつまり明日の金目当てなら合併だという事。

来年は唐桑のために何かできるといいなと思った。

今朝は本吉の高橋工業の工場で聖徳寺の鉄の墓の試作品を見る。実物を見て良かった。上部フタの細工が荒っぽい。メッキも上手くいってない。写真ではわからぬところだった。高橋と相談して改良策を講じる。アルミ家具の改良方法も相談。リアス会の面々にアルミ、塗装のメンバーがいるので相談に乗ってもらう。これからのつめが大事だ。

十一時過ぎ、一ノ関ベーシーへ。

菅原正二と本当に久し振りの再会を果す。握手した手の少しばかりの冷たさが、チョッと老いを感じさせたが、菅原も私の手にそれを感じたろう。

いつものように、ベーシーの闇は心地よくベーシーの音はピュアーであった。

この男の生き方は本当に見事の一語に尽きる。ジタバタしない。あきらめ切って揺るがぬところがある。典型的市井の隠である。

二十一世紀の生き方とは何だろうと、二〇世紀的思考を巡らせるならば、菅原正二的生き方ではないかと思う。

ジャズはアメリカで生まれた。アフリカから連れてこられた黒人達の唄、ブルースが源である。ある意味ではアメリカは全世界の植民地だ。ヨーロッパがネイティブ・アメリカンを駆逐して占領した国だ。その矛盾をジャズという音楽様式は体現していた。

黒人がアメリカ社会で顕在化し主導権を握ることができたのはわずかにプロスポーツの世界であり、芸術文化ではジャズであった。哀歌であったブルースがジャズに生まれ変わったのは移植されたアフリカがアメリカ化する巨大な混沌のるつぼがあったからだろう。ジャズは一九六〇年代に最盛期を迎え、それから急速に衰退した。コルトレーンの巨大な混沌によってとどめをさされた。マイルスの美しさによって頂上が極められた。それから急速に衰退する。どうしてなのか。ジャズの盛衰と日本の盛衰が期を一つにするのは何故なんだろう。

文明文化は異物と遭遇し混濁する時に最も凄惨なエネルギーを生み出す。

今、不思議な事にジャズは菅原正二のベーシーに凍結されて保存されている。数々の巨人たちが作り出し、織りなしたサウンドは後継者も無く、ベーシーの闇で聴くしかない。

今日も一ノ関ジャズ喫茶ベーシーには三々五々恐らく遠来の客であろう人々が来店している。皆、ジャズとは縁遠いと思われる人たちだ。近年ますます、その神話的存在の呼び声が高くなっているベーシーを拝観するための人たちなのだ。それを笑ってはいけないのだ。笑うことは自分を笑うことになる。

ジャズ喫茶ベーシーは二十一世紀日本をズーッと同じ調子で予感し、暗示してきた。
俺も菅原には恩がある。通俗の闇に落ちた時、どれ程菅原には助けられたか。
「ピース&ラブとはね石山さん、義理と人情ってことなんだね。」
この友人は時々、不思議なことを言う。
韓国家庭料理トロントの主人と知り合いになって、店のイギリス製アンティーク家具を見せてもらう。二〇万円で買ったのだと言う。ベトナム・ホーチミンシティの家具屋で、一万円もしないで同様なモノを見た記憶があるが、それを言っちゃーおしまいよ。
十二月の始まりの日をベーシーで過ごせてよかった。夕方、東京着。
別れ際「無駄なことしないで」と菅原に言われた。わかっているのですよ。それが肝心って事くらい。でもそれが一番むづかしい。
何とかして東北に再び仕事を作ろう。そうすれば自然にベーシーに通える。一ヶ月に一度、ベーシーで菅原の音に浸れたら、俺みたいな通俗の輩でも、少しはアノ品の良さのカケラでも身につけられるかも知れぬ。
菅原が二度目のカウント・ベーシーの墓参りに行った時のニューヨークの写真は良かった。ニューヨークの高度な無機質と女たちの尻の連写が何とも言えずいいんだな。こういう建築がつくれればいいんだぜ、キット。一枚持ってけばと渡されたので、これは額に入れて愛蔵しよう。
夜七時過ぎ西調布、聖徳寺墓の打ち合わせを少々。九時世田谷に帰る。星の子愛児園打ち合わせ。遊具は少しばかり前進していたが、家具はダメ。本当は子供の椅子やテーブルはすごくむづかしいのだけれど、それだからと言って手をゆるめるわけにはいかないのだ。小さな木片の遊具を次にやってみよう。
モンスターの様々。